

〈翻訳〉

エミール・ド・ラ・ベドリエール作「法科大学生」

七尾 誠

L'Etudiant en droit par Emile de La Bédollière

Makoto NANAŌ



図 1

一人の若者がコレージュを卒業する。彼は大学入学資格試験に合格したばかりである。つまり、いわゆる「勉学」を終えたわけであり、ということは、十年間の勉強によって、よい辞書の助けさえ借りれば、ウェルギリウスとイソップの寓話の説明ができるようになったことを意味している。彼の父親と母親は、家の炉辺にすわりこんで彼らの一人息子の将来につ

平成16年10月29日 原稿受理
大阪産業大学 教養部

いて話しあっている。「あれには法律をやってもらわねば」と、父親が重々しく、もったいぶった口調でいう。「教育の最後の仕上げだ。弁護士の肩書きがあればどんな道でも開けてくるのだ」。

おお、無邪気で家父長的なブルジョアよ！弁護士の肩書きなどなんの道も開いてくれはしない。法科大学の教室の椅子に毎年腰掛けにやって来る何千もの生徒たちはどこに行ったのであろうか？彼らはみな名誉があり、金にもなる職を得ているのであろうか？弁護士席や裁判官席で目立っているのだろうか？残念ながらそうではない！彼らの多くは裁判所に足を踏み入れることもない。何人かは公証人や代訴人、執達吏にはなっている。残りのものたちはさまざまな職についている。顧客のつきそうもない株の売買の取引のあの代理人、彼も法律を修めている。田舎で古着やぼろを行商して歩くあの二枚目役者、こいつも法律を修めた。料理女になりかわってお追従の手紙を韻文や散文でしたためるこの代書屋、実はこいつも法律を修めてはいるのだ。マダム・サキの劇場¹⁾の大きかりな見せ物芝居の構成をしているあそこにいる劇作家、あれは弁護士の宣誓をしている。官庁や個人事務所、軍隊や商店、露店には、なんとか糊口をしのいでいる元法科大学生がうようよといる。彼らは法律を学ぶという空疎な口実のもとで失われた三年間を後悔しているのだが、法律については一言も知らないままである。

それはともかく、毎年十一月になると、一団の若者たちがフランス全土から次々にやってきて、カルチエ・ラタンのホテルに山積みとなる。これは広大な野営基地であって、その前哨基地は一方ではポン・ヌフに達し、他方ではアンフェールのバリエール²⁾にまで広がっている。

新参者はともかく腰を落ち着けた。初年度の学生登録をしたし、教授の選択もしたし、授業に初めて出席したが、そこにはこれ以降できるだけ顔を出さないように気をつけるようになるであろう。さて、これ以上にながら必要であろうか？一人の女性、彼と共に人生の苦しみを分かちあってくれて彼のブーツを磨いてくれる伴侶である。彼は探しにかかる。二年生の同郷の一人、休暇中に立派な礼儀作法としっかりとした会話で故郷の上流社会の面々を眩惑した学生が、われらが初心者のご立派な両親によって、若き跡取り息子がただただ震えながら置き去りにされているパリという名の呪われたバビロンの暗礁を横断する実体験の案内役

1) 19世紀前半にタンブル大通り（犯罪大通り）にあった小劇場。映画『天井桟敷の人々』で主要な舞台となったフェナンビュール座の隣に位置していて、パントマイムを中心としたスペクタクル大衆演劇を上演していた。

2) モンパルナスの東に位置する19世紀のバリエール(柵)に設けられていた市門。バリエールは、当時は市内と郊外の境界であり、入市税徴収の関門であった。

として任命されたのである。みずからの任務に忠実なメンートルは、若きテレマック³⁾が到着した翌日にモンテスキュー・ダンスホール⁴⁾につれていく。それは一つには、ただちにそれまでの良き習慣と縁を切らせるためであるが、他方では案内役自身の個人的なかつての知り合いと再会するためでもある。一度のカドリールと二度のギャロップを踊れば、われらが若人がエレガントな踊り子と親密になるには十分である。彼女は、イルマ、アマンダもしくは同じ名前のちがう名前前で受け答えをする。彼女は疑いもなく賢明である。住所を教えようとはしないのだから。しかし、われらが学生はそのうち彼女に再会することになる。彼は彼女をつけねらい、ドーフィヌ街のせまい歩道を歩いているところをつかまえる。彼女は、タータンチェックのショールにつつまれ、ビロードの帽子をかぶり、腕にはわれらがすばらしき首都における大多数の女性の欠くべからざる物置部屋ともいえる麦藁バスケットをぶらさげ、きちんとしているかどうか判然としない靴をはいている。そのようなあまり有利とはいえない外見にもかかわらず、学生は探し求めていた踊り子のすらりとした体つきと美しいまなざしを認めるのである。彼が、彼女の優しい心と自分にとってちょうど良い心身をもっていることを見抜いていることを付け加えねばならない。こうして彼の選択は成され、モン・パルナスのグランド・ショーミエール⁵⁾のテーブルにおいて同盟条約は締結された。ここにいるのは、もはや交差点の埃や泥を掃き清めて清掃人に協力するような靴をはいていた先日の惨めな娘と同じ人物であるとはとても思えない。彼女は粋で、エレガントでまばゆいほどであり、髪はカールし、化粧して、めかし込んで、魅力的である。リネンの帽子をかぶり、モスリンのドレスを着、白い靴下をはき、青い縮緬のスカーフをつけている。

学生とグリゼット⁶⁾の愛は、近頃の劇に出てくるような観客の涙を誘う熱狂的なものではない。ほどなく、彼は彼女を使い走りと同様にあつかうようになる。タバコや酒やハムを買いにいかせたりするようになる。彼が、友人たちを歓待するときは、宴会のホステスをつとめる前に肉を料理し、食卓の準備をしなければならない。彼女の名誉のために、グリゼットはこうした家事全般にすばらしく長けているということをいっておかなければならない。そのことによって、彼女は彼にとって不可欠であり、まるで既婚女性のような風格がそなわっているのである。あまりにもはかないこの結びつきが長期休暇によって中断され、手紙を

3) 1669年刊行のフェヌロンの小説に由来する。テレマックはユリシーズの息子で、メンートルは父親を捜し求める旅の随行者であるが実は女神ミネルヴァである。

4) モン・パルナス、カルチエ・ラタン付近にあったダンスホール。

5) 1787年開店のダンスホール。後出のグリゼットと対にして語られることが多い。cf. Alfred Delvau, *Les Cythères parisiennes*, E. Dentu, 1864 (pp.5-10)

6) 通常、「お針子」の意であるが、さまざまな職種についていた自立した若い独身女性で、学生や芸術家の卵の手軽な恋の相手となった。本稿「あとがき」参照。

書くよと約束するかりそめの夫に涙ながらにさようならをいえるなら彼女は幸せなほうである！しかし、往々にして夫婦としての生活に飽きて、恩知らずな学生は自由を取り戻すことを夢みはじめる。彼は彼女に喧嘩をしかけ、不実をなじり、予備的な仲違いの結果、決定的な破局がやってくる。彼の後がまにすわるのは友人の一人であり、不幸な娘は、約束手形や質屋の質札のごとく男たちの手から手へとたらいまわしにされる。年老いて色あせ、墮落の最終段階にまでゆっくりと落ちていくまで。

家で食事を用意してくれる女性がない場合には、法科大学生は山ほどあるレストランから選ぶことができる。豪勢な広告が、十八スー⁷⁾で健康によい豊富な食事を約束してくれているのだ。プーボン、ヴィオー、ルソー！これらの店はフィガロ⁸⁾と同じくあまりにも中傷されすぎているが、そうした評判よりもずっとましである！馬の頭を仔牛の頭に変身させたり、アンゴラ猫をまことしやかなウサギのシヴェとして供したりする無邪気な料理人たちを非難できるのは悪意だけである。ステーキはたぶん「固い」し、ブイヨンは水っぽすぎるし、挽肉はすこし疑わしい。けれども、それでもなおこれらの店は充分評価に値するし、優しい心ともものわかりのよい胃袋をもち、ポケットに十八スーを持っている常連客もたくさんいるのだ。中傷者にはいわせておけばいいのだ。これらの店は安価な美食の敬すべき聖域なのだから。法科大学がパリにあるかぎり、これらの店は、絶え間なく増え続ける群衆に十サンチーム⁹⁾の半分量のポターージュと一皿あたり六スーの鴨のかぶら添えを提供し続けることであろう。



図 2

法科大学生はどのような目立った外見をしているのか、と問われたら、われわれはつぎのように答えるであろう。彼らは最新のファッションに身を包んでいるわけではないが、自分自身の独特のファッションを創造しているのだ、と。彼らは、すすんで髪の毛と髭を伸びる

7) 一スー sou は当時の貨幣体制では二十分の一フランであり、今日の日本円に換算して約五十円。

8) 実在の大衆レストラン。このうち、「ヴィオー」はバルザックのいくつかの小説に登場し、「ルソー」はユゴーの『レ・ミゼラブル』に登場する。

9) 百分の一フラン。今日の日本円にして約十円にあたる。

にまかせているが、それは食料品屋と間違えられないためらしい。しかし、試験官の前に姿を現すときまでに、こうしたアナキーに見える表象は注意深くぬぐい去られる。そういうときにはジャコバン党員に見えるように髪型を変え、髭によってルイ十三世の宮廷の貴族に見えるようにように工夫する。かつては、ロベスピエール風の灰色帽子と赤いベストに身を包んだ自分を自慢する彼を見た者もいる。今日では、ベアルン出身であろうとなかろうと、ベレー帽と赤いベルトを身につけている。地方色があるという理由で。巨大なパイプは、学生にとって是非とも必要なアクセサリーである。断固とした喫煙者である彼は道行く人々に専売公社の煙草の吐き気を催させるような煙をふきつける。彼のパイプのボウルには、多かれ少なかれカーボンがついていて、トルコ人やアンリ四世、ロベール・マケール¹⁰⁾ やフランソワ一世、サン・ジュストなどのようにも見える。アルジェリアの長ギセルやインドの水ギセルを手に入れることができようものなら、彼の心は喜びに飛び跳ねるのだ。そうして、ユトレヒトの赤いビロードをはったソファに横たわると、かれは東洋人の身のこなしを見せることになる。カルチエ・ラタンの王として、彼は劇場を支配し、居酒屋を支配し、街路を支配する。下宿の管理人は彼を尊重し、レストラン経営者は彼を客として期待し、カフェの主人は彼を愛情とともに見つめる。彼の信用は絶大である、彼の両親が「立派な」人間であるから。彼には高い地位が与えられ、若い娘たちからは親切的な微笑みがむけられる。無敵のサルタンとして、彼は自分の意のままに寵愛をふりまく。それは、まるでパンテオン座やリュクサンブール座¹¹⁾ の棧敷席に足繁く通う女性たちに花束を美と気品の証明のかわりに贈



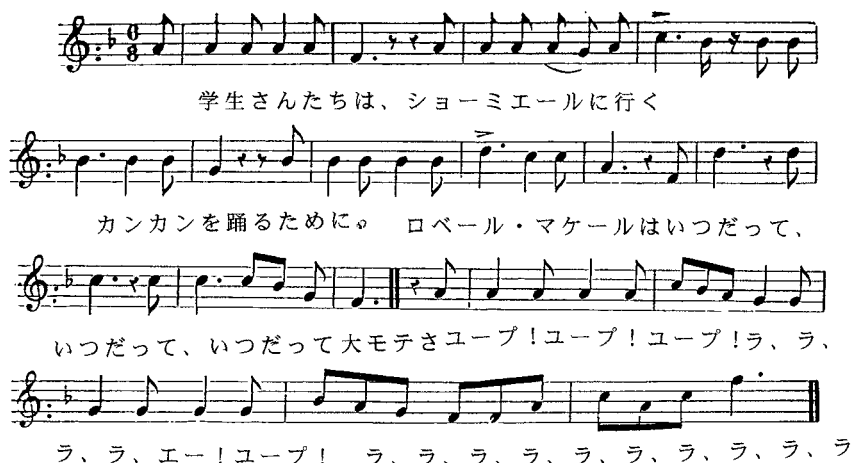
図 3

10) ロマン派劇の名優フレデリック・ルメートルの当たり役。一種のピカロであって劇は大ヒットしてシリーズ化された。また、キャラクターとして独立してさまざまな物語がつくられた。

11) いずれもカルチエ・ラタン付近にあった劇場。学生とグリゼットでにぎわった。

るかつての佳き日の雅な紳士たちのようでさえある。

ここで、もっとも典型的な性格が浮かび上がってくる。それは、学生たちが「バンボシュール」と呼ぶものたちである。同級生たちは、エスタミネやガングット¹²⁾をせいぜい気晴らしとして利用するだけである。だが、「バンボシュール」たちはそこで毎日を過ごすのだ。彼は朝の十時に居酒屋に入っていく、たっぷりと昼食をとり、無数のブランディ・グラスとビール・ジョッキを空にし、かなりの量のパイプ煙草を吸い、ピケット¹³⁾やビリヤードで遊ぶ。そして夜中の一時過ぎに腹の底から歌われるコーラスに参加するのである。



学生さんたちは、ショーミエールに行く
カンカンを踊るために。 ロベール・マケールはいつだって、
いつだって、いつだって大モテさユープ！ユープ！ユープ！ラ、ラ、
ラ、ラ、エー！ユープ！ ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ

カーニバルは「バンボシュール」にとって心身の根幹となる不可欠な要素である。このときにこそ、彼はもっとも光り輝くのである。仮面舞踏会の混乱に乗じて盗まれることを案じて、彼は質屋の係員に腕時計を急いであずける。そして、公正な管理者は、御者に仮装するためにはまるで役に立たないマントも引き受けるのである。この瞬間から、もはやなんの心配も、未来への気遣いもいらないのだ！「バンボシュール」は、一度も学生登録をしていないし、テストをうけることもないであろう。彼には、切り開くべき将来もなく、よろこばせるべき家族もない。彼の全能力は、いま現在、いま飲み干そうとしているワイン、人夫に仮装¹⁴⁾して髪粉だらけになった女友だちとのワルツ、舞踏会の喧噪と陶酔に集約されているのだ。

もし、この熱狂の夜、平静な傍観者がパンテオン座の天井から下界を見下ろしたとしたら、

12) 細かく分類すれば差異はあるが、居酒屋の諸形態である。

13) カード・ゲームの一種。

14) 本稿末尾のガヴァルニのイラスト参照。カーニバルにおける若者の仮装の定番。

最初のうちは透明絵の具をかぶせられて有毒なガスにおおわれたさまざまな色彩の混淆しか見ることはできないであろう。ついで、この混淆の真ん中に漠然と、頭や腕や脚を見分けるようになるが、これらが誰の体の部品なのかは見分けることはできない。それほど、この密集した群衆は目の回るような速さで動き、回転し、拡がり、ぶつかりあい、渦を巻いているのである。平土間の奥底から、つんざくばかりのバリトンからかん高いファルセットまで、人間の声のありとあらゆる調子でできあがった不協和音のぶんぶんうなるような音が沸き上がってくる。それは、戦場の混乱にも似た光景であり、いよいよのない喧噪であり、人間の形をした迷路であり、踊るものたちのパンデモニウム¹⁵⁾である。これこそが仮装舞踏会なのである。

学生の外面が彼の身体的な習慣を的確に示しているとしても、彼の内面を探ってみることも一興ではあろう。美術、文学、哲学、政治、彼はあらゆるものを研究する、法学を除いてではあるが。彼は、新刊の小説をむさぼり読み、思うさまに評価する。枕元に押しピンでとめられたジョルジュ・サンドの肖像は、この著名な両性具有者への彼の熱狂を示している。彼は、バルザック氏の後をついて現代風俗を探求し、現代詩の指揮者としてヴィクトル・ユゴー氏を讃美する。王子と姫と腹心の家来との足し算による算数の法則でできあがっている、もったいぶっていて堅苦しい古典劇に夢中になることはなく、彼は胸を打つようなドラマが躍動し脈打つものに自分の熱狂を捧げる。お気に入りの作家の斬新な戯曲が上演されるとなると、学生は夕食抜きで二時から列に並び、切符売り場に一番に到着し、一撃の下にたった一枚残った切符を手に入れる。一つの棧敷席から口笛が発せられると学生は、「出ていけ！出ていけ！」と叫ぶ。「あれはアカデミーの会員に違いない」。また新たな口笛。「出ていけ！」と、学生は繰り返す。「古典派など縛り首にしまえ！」調和のとれた崇高な韻文の長台詞の場面になると、酔いしれた観客全員は拍手喝采をし、喜びに小躍りする。学生は夢中になって拍手をし、アカデミーの会員であると著しく疑われる人物の方に侮蔑のまなざしを投げかける。

法科大学生は、ほぼ例外なく音楽家でもある。彼はファジョレット¹⁶⁾やフルートまたはホルネットを習い、アコーディオンで「月の光に」を弾いたりする。警察の規定にもかかわらず、彼の狩猟ラッパは夜のしじまに響きわたる。劇場から帰宅して、中道主義的な新作劇を観てしまった自分を慰めるために、真夜中の一時に彼は楽器を口にくわえる。家主はわめきちらし、隣人たちは烈火のごとく怒り狂う。でも、それが何だというのだ？大胆不敵な巨匠は、近所の猫たちの暗黙の了解のもとに自らの妙なる騒音を奏で続けるのだ。肺活量が枯

15) ミルトン命名の地獄の首都。伏魔殿。

16) フルート属の木管楽器。

渴すると、彼は詩の女神に身を捧げる。彼には偏執狂がとりついているので、書かずにはいられないのである。彼はいくつもの原稿を雑誌社や新聞社に送りつけるが、掲載されることは決してない。大通りのいくつもの劇場の支配人たちにドラマやボードヴィル作品を送付し、読んでももらえないことに悲憤慷慨する。彼は八折版にして二巻分もある私的な小説の手書き原稿を、さまざまな傑作の良心的で控えめな委託販売業者であるラシャペルや H. スーヴラン¹⁷⁾のもとに持ち込む。彼の入念に練り上げられた小説は、ほとんどいつも次のように始められる。「春の美しい朝方、大きなマントに身を包んだ二人の男が丘を降りていった……。」また、時として彼は以下のようなやり口に従って「*問題点そのものに、ずばりと*」¹⁸⁾切り込む。「『大体において』と、見知らぬ一人の若者がハンガリー・ワインで満たされた大杯を一口で飲み干していった。『われわれは、とても奇妙な時代に生きているのだ……。』彼の詩は、肺病に冒されているかのようであり、病的でくるを病み、人を絶望させ、自らも絶望の淵にたたずむもののそれであり、ジョゼフ・ドゥロルム¹⁹⁾を範としたものである。その中には「われ」と間投詞がはびこっている。次のような詩句が典型的なものであろう。

おお！人々の中をわれは一人で歩む、
さまよえるユダヤ人のように。そして、われは
蒼白く夢みがちなこうべをたれるのだ！！
わが憂愁の毒にすみずみまで冒されて！
おお！わが心は引き裂かれた！われは
不幸を余すところなく飲み干したのだ！！

この詩句は、煙草の紫煙の雲と、スピリッツの瓶とから得られた靈感の中で花開いたものである。編集者たちと栄光が彼に背をそむけているのを見て、学生は自分自身を不遇の天才であるとみなすことになる。そして、ポン・デ・ザール²⁰⁾を横切る時には、自分と奈落との距離を獐猛な目つきで測るのである。しかし、彼は哲学の中になぐさめを見いだすであろう。なぜなら、哲学もまた、彼の管轄に入っているのだから。なにかしらの学説が唱えられるやいなや、学生たちの中に信奉者や信徒、狂信者が出現する。王政復古期にはヴォルテー

17) 当時の出版業者だと思われるが不詳。

18) 原文はラテン語。以下、本稿ではラテン語原文の場合、日本語をイタリックにした。

19) 今では批評家として知られるサント＝ブーヴ（1804-1869）の詩集『ジョゼフ・ドゥロルムの生活と意見』への言及。

20) セーヌ川にかかる橋。フランス学士院（アカデミー）が近くにある。

ル主義者だった彼らは、時代の動きを追いかけてきた。そして、彼らの思想はだんだんと精神的かつ宗教的な色彩を帯びるようになってきている。ある者たちはサン・シモンの経済学説やフーリエの夢に拍手をおくる。また、ある者たちは、パウル・アンファンタンと意見を同じくして、肉体を立て直すことが急務であるという。これに関して彼らは、プラド・ダンスホール²¹⁾の常連客となるとという偉大なる貢献をなしているのだ。

法科大学生の政治に関する意見は、虚弱体質で喘息持ちの人々の意見と同じである。「たしかに君は若い。ばかばかしい！そうした考えはそのうちに消え去るものなのだ。」または、こうである。「それは決して実現し得ない美しい夢だ。青春時代の熱狂状態であったといずれは気づくのだ。」三十才を過ぎたら、腹が出て軟体動物のような姿に近づかなければならないのだと確信しているものたちもいるのだ。学生は熱狂的な愛国者である。彼の部屋には山岳党の幹部たちの肖像が飾られている。七月革命は、彼にとっては甘ったるい革命であり、しゃれものや絹の靴下をはいたものたちによる革命でしかない。1830年には、全ヨーロッパに対して宣戦布告がなされ、三色旗が世界一周の旅をするべきであったのだ。彼はポーランドの運命に涙を流し、専制君主制を呪う。国中で募金運動が盛んになった頃、署名名簿には次のような煽動的なメモ付きで彼の名前が記されていた。「A…B…、自由と祖国の友にして、暴君と抑圧の敵、二十五センチム。」今は亡き人権協会には法科大学生がたくさん入っていた。彼らは支部で長々と自分の意見を述べ立て、アントワヌ地区とマルタン地区では蜂起する準備ができていると公式に表明し、紅い帽子をかぶって野宿し、必要とあれば暴動にむけて武装しようとしていた。ああ、悲しきかな！盲目的な熱狂にかられた幾人かの犠牲者が、サン・メリーの舗石の上に倒れたのであった。

法科大学生と警官との間には根強い憎悪が存在している。これは、モンタギュー家とキャプレット家²²⁾以上に和解しようのない敵同士であるが、それには理由がないわけではない。大衆的なダンスホールでカチューチャ²³⁾を踊る学生を現行犯で逮捕し、豚箱に放り込むのは誰であろうか？彼らの身のこなしの危険なまでの柔軟性を抑制しようとするのは誰であろうか？それは警官に他ならない。しかし、法科大学生のいだけ反感の動機は深刻なものである。彼は警官の中に見える武装兵士や公的秩序を嫌悪するのだ。警官が、近づいてくるのを遠くの方で気づくと、できる限り侮蔑的な反応を体で示し、首筋をのばして、口ひげの中で「犬め」という侮辱の形容語をつぶやくのである。

21) グランド・ショーミエールと同じく、学生たちに人気のあったダンスホール。

22) シェイクスピア『ロミオとジュリエット』の敵対する二つの家系。

23) スペイン由来の激しいダンス。「カンカン」と同じく、公序良俗に反するという理由でしばしば禁止された。

それにもまして、法科大学生の政治に対する大げさなふるまいは、外面的である以上にむしろ真性のものである。その仰々しいふるまいの裏には誠実で高貴な魂への共感が隠されている。だから、分別盛りの年齢に達した法科大学生が青春時代の信条を否定するであろうとは思わないでいただきたい。有権者としての彼は、反対票を投じる。父親としての彼は、自分の信念を子孫に伝える。彼こそは、進歩と共に歩む歩哨兵であり、いつでも彼の声は有益な改革の味方として挙げられる。

しかしながら学生たちの中には、どんなことにも後込みせずに頑固に勉学にしがみつくと若者たちもいることはいる。そして彼らは、法律の勉強に、歴史や文学の真摯な研究を混ぜ合わせる。この不毛ではあるが、みかえりは確実な途を選ぶものたちは「ガリ勉」と呼ばれている。

「ガリ勉」は、浪費癖からくる快樂も苦勞も知ることはない。ほとんど目にしないが故に伝説的存在である彼は、自分の道を自分で切り開いていく、恒産のない若者であり、あえてデュラントンの著作を読んだり、青ざめることもなくダロズやシレイ²⁴⁾の膨大な判例集に立ち向かおうとする。彼は弁護士のもとに身を置き、そして二年の勤勉な労働ののちに第三見習いという重要な職分を手中にする。彼はそれよりもっと上にのぼっていくであろう！

一年に一度、「ガリ勉」にならない学生はほとんどいない。試験期間の接近がカルチエ・ラタン中に激しい混乱、全体的な大騒ぎをもたらすからだ。各人は、それぞれの勉強にとりかかり、長い間放り出していた法典集にかじりつく。徹夜をし、外出せず、自分自身を面会謝絶にし、ログロンとデュコーロワ²⁵⁾と共に生きながら地中に潜る。法律の文面を分析し、解剖する。そして、六週間の労苦ののちに、しばしば不合格になるものもいる。そういうとき、犠牲者は不当だと叫び、教授たちを極悪人呼ばわりするのである。

大部分の学生たちは、三年、四年または五年あれば、学位論文を含めて五つの試練を突破することができる。弁護士資格の宣誓をする榮譽を得たばかりのものを居酒屋「パ・ベルデュ」の客たちの中で見分けることは簡単である。彼は、借り物の法服を着て、そっくりかえって歩いている。彼の胸の膨らみはラバ（胸飾）を押し上げている。彼は腕の下に訴訟書類に見せかけた紙片でいっぱいのおもちゃを持っている。裁判所に会いにくるように知人たちを誘い、回廊を連れて歩く。司法の名士に出会うと、素人たちに自分が前述の名士とつきあいがあることを納得させるために頭にかぶったトック帽（法官の縁なし帽）を少し上げてみせる。

司法修習は法学士にとって、こんがらがった障碍である。弁護士会の規則は、志願者が弁

24) デュラントン、ダロズ、シレイは共に当時の著名な法律学者または弁護士。

25) ログロン、デュコーロワも共に当時の著名な法律学者。

護士にふさわしい部屋に住んでいることを要求している。つまり、二階か三階²⁶⁾に住んでいて、十分な量の法学書が備えられた書斎を所有していることが必要なのだ。けれども、法学士はソルボンヌ広場に、三階半よりは上層の六階²⁷⁾に住んでいるし、法学書に関しては、ベランジェ²⁸⁾の歌本や、ヴォルテールのコント集、社会契約論、不揃いのポール・ド・コック²⁹⁾の小説とそのほかのどこにでもある古本しか持っていない。幸いなことに、友人の一人である実業家が豪華なアパートマンの部屋の鍵をかしてくれる。学士は、彼の友人の部屋を自分の住居として届け出て、必要な条件が満たされているかどうかを判断する弁護士会への報告者は、このような若い新参者がこれほど豪華に住まい、書庫がたくさんの書物に満たされている上に見事な選択がなされていて、仕事机が書類やさまざまな種類の記録でいっぱいなことに驚愕するのである。

討論会においては、学生たちと新米の弁護士たちが未亡人と孤児を養護する術を学ぶ。見習いの弁護士は自分の学殖と同じくらいの誇張と共に弁護する。彼は、ディジェスト、ポチエやガイウス³⁰⁾の慣習法を引用する。そして、自分の演説をラテン語の語句で調味する。

「そうです」と、彼は言う。「われわれの敵対者は『まったく権利を有していない』者であります。彼をかりたてているものは利益への愛情であり、『利益の取得につとめる』ものであります。しかるに、われわれ、すなわち『損害の回復につとめる』ものは！」

見習い弁護士は敵対者のいうだろうことを先取りすることを好む。以下のような調子の裏

26) 19世紀当時のパリ市内の賃貸住宅である「アパートマン」においては、家賃が一番高かったのが二階部分であり（一階は門番夫婦が住み、店舗にも使われた）三階がこれに次ぐ。二階、三階に居住していることは地位や身分、収入が上層であることを意味している。なお、日米でいう一階は欧州においては「地上階」となり一階分のずれがおこる。すなわち、ここで「二階」と訳したのは、原文では「最初の階」である。

27) 上の注に示した下層階の住民とは逆に五階・六階の住民の多くは貧乏であり、特に最上階には、学生たちや芸術家のたまご（若き日のバルザックやデュマなどもそうであった）やグリゼットが暮らしていた。

28) 1780-1857。詩人・シャンソニエ。19世紀前半のキャバレなどで活躍した反体制の風刺・政治作詞家。

29) 1794-1871。19世紀後半における大衆的な流行作家（『19世紀ラールス』も「多産な作家」と呼んでいる）。今では完全に「忘れられた作家」ではあるが、当時のコックの読まれ方と社会的な影響力は、やはり同時代の流行作家であったウージェーヌ・シューと同様に、現在のわれわれが想像できないほどのものであった。愛読者には、マルクスやドストエフスキーがいたといわれている。さまざまな大衆小説以外にも、『フランス人の自画像』やメルシエの『タブロー・ド・パリ』と同じようなコンセプトにもとづくアンソロジー『大都会』*La Grande ville*, Au bureau central des publications nouvelles, 1842なども著した。

30) ディジェスト、ポチエ、ガイウスは、やはり当時の著名な法律学者。

返った声で始まる弁論のいくつかに出会わないことはまれである。「しかし、とおっしゃることでありましょう。」そして次に、彼になされるであろう抗弁の数々を並べ上げた後に、腕まくりをして、腕を天空に向けて叫ぶのである。「さて！みなさん、わたくしは聞きたい。これ以上に非論理的な理屈を想像できるでしょうか？これほど原則に反した理屈を、これ以上に根拠のない、これ以上に奇妙な、これ以上に……。ここらあたりでやめておくことにいたしましょう。なぜなら、わたくしの常に増し続ける義憤はたぶんあまりにも遠くへわたくしを連れていってしまうでしょうから！」

彼らは言葉と声になり、それ以外のなものにもあらず

こうした誇張にもかかわらず、見習い弁護士は即興的な技術の訓練を受けさせられる。判事から裁判長そして検察官へと、原告から被告へと、次から次へ演じさせられる。彼はやってくる質問に対して、賛成であれ反対であれ、即座に弁論することを学ぶ。こうして、その日その日の応用技術しか持たない人間ができあがるのである。

われらが学生が巣から飛び立った今、彼が学校の埃を振り払った今となっては、われわれは彼の司法界での成功と、依頼人が絶え間なくやってくることを祈ろう。そして実りのない企ての後に、ジャーナリストになってしまったり、ハンガリー騎兵の志願兵になってしまったりしないように願いたいものだ。

あとがき

本稿は『フランス人の自画像』*Les Français peints par eux-mêmes* 所収のエミール・ド・ラ・ベドリエール Emil de La Bedollere の記事「法科大学生」*L'Etudiant en droit* の全訳である。なお、アンソロジー『フランス人の自画像』については、『大阪産業大学論集 人文科学編 109号』所収の拙稿「ジュール・ジャン作『グリゼット』」の中の「『フランス人の自画像』について」(pp.123-124)を参照されたい。訳稿の底本、参照英訳版についても同じである。

エミール・ド・ラ・ベドリエールについて

Emile Gigaut de La Bédrière (1812-1883)。弁護士、ジャーナリスト。非常に若くからジャーナリスト・コラムニストとして活躍した。「ユニヴェール・イリュストレ」誌創刊の前に、雑誌「シャリヴァリ」、「ジュールナル・デ・デモアゼル」、「シエークル」などに執筆。主な作品を以下にあげる。『冬の夕べ』(1838)、アンリ・モニエの挿画による『実業家たち』(1842)、

『フランス人の私生活情況』(1847)、ギュスターヴ・ドレの六十点の挿画が付された有名な『新しいパリの物語』(1860)、そしてガヴァルニのイラストによる『ロンドンとイギリス人たち』(1862)。

挿し絵について

収録した挿し絵はすべてガヴァルニによるものであり、もともと原本に付されていたものである(図4と図5を除く)。

図1にあげたパイプをくわえた大学生の肖像画の右下部に記されたラヴィエユ Lavieille という署名は、当時活躍した木版彫版家のものであり、原画の作者であるガヴァルニの筆記体による署名は左下部に裏返った形で彫られている。



Allons souper ! qu'est ce qui en joue ?

図4³¹⁾

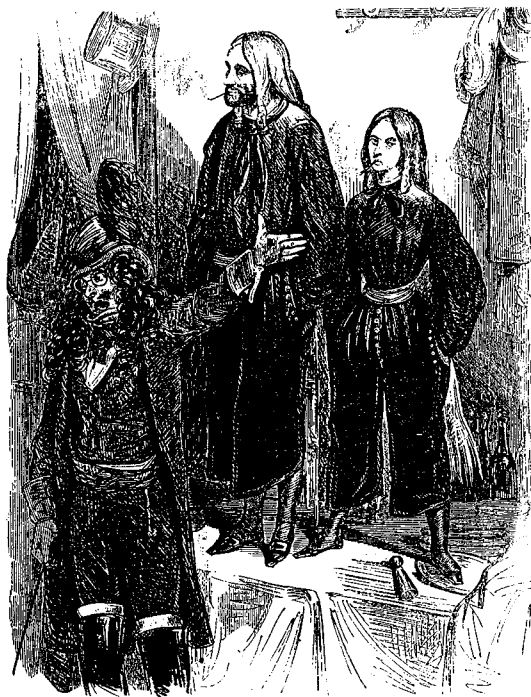


図5³²⁾

31) 「パリの学生たち」と題されたガヴァルニの連作版画の一つ。ピエロの仮装をした男性が人夫(デバルドゥール)姿の女性を抱いている。伊丹市立美術館編『ガヴァルニ展—19世紀パリの生活情景』、p.92。

32) 上と同じくガヴァルニの連作版画「デバルドゥールたち」より。伊丹市立美術館編『ガヴァルニ展—19世紀パリの生活情景』、p.66。

こうした、「彫版家が自分の署名を作品に残すこともある」という慣行を知らなければ、妙な誤解が生まれることになる。東京書籍刊行の『欧州共通教科書・ヨーロッパの歴史』（花上克己訳、木村尚三郎監修、1994年）の中に、「ラヴィエルの風刺画」とあるのは、こうした誤解の産物であり、原画の作者は当時の売れっ子イラストレーターであるベルタル Bertall であることは、周辺情報（当時の書物）にあたれば一目瞭然ではある。